全体会議

はじめに　　コメンテーター　今泉　重敏氏

今泉：先ず、皆さんに夫々五分ほど感想をいただき、それから二つの分科が抱える課題、現在の問題点、今後の展開等について分科会ごとに議論をしたいと思います。もちろん会場からのご意見や質問の時間もとります。そして全体を踏まえこれから文化ボランティアとしてどういう意識を持ってどのようなことに取り組むべきか、また行政との役割分担についてなどフリーでディスカッションをしたいと思っています、そして最後にもう一度パネリストの方の感想をきいて総括という形で進めていきたいと思います。楽しくやりたいと思っていますのでご協力お願いいたします。それではまず古賀さんお願いします。

古賀：。私は各分科会を半分ずつ拝見しましたが、先ほどから報告を伺いどちらの分科会の内容にもかなり共通している部分があると思いました。午前中私がお話したことで言えば、施設系の文化ボランティアの方たちは、施設あるいは行政側から募集をかけ、それに応募して来られた方が多いので、若干受動的な雰囲気もあるかもしれません。一方まちづくり系の方たちはそもそも自発的な集まりなので、私のイメージではまちづくり系の方が抱えている課題や今後の展開は、施設系の方にとっては未来形かなと思っていましたが、やはり共通するものが多いと思いました。

例えば活動している方の高齢化や自主的自発的に動く人をどう育てていくかということはどちらも同じで、永遠に付きまとう課題だということですね。だから私がお話した(９P資料　参照）施設系の文化ボランティアの①番の最初の施設から依頼され補助的な業務をすることから②番③番へと歩みを進めていくにはどうしたらいいかということもずっと検討していかなければならない課題で確固たる解決策はないのだろうと感じました。しかし皆さんは、それではどう解決するか、ヒントを得たいと思って来ておられる方も多いと思いますからこの後、その辺のお話を皆さんと一緒に出来ればいいなと思います。

今泉：ありがとうございました。やはり共通する部分がかなり多いということで、その共通する部分をどう解決するかということですね。では次に今村さんお願いします。

今村：私も古賀さんが言われたように共通する部分が多いことを凄く感じました。私は本業がボランティアセンターの職員ですからいろいろな団体運営の相談を受けますが、文化ボランティアだけでなく福祉、国際協力、環境活動などあらゆる分野で聞かれる内容だったなという印象を持ちました。私が担当した施設系ボランティアは、わりと労働的な部分や自発性が高めにくいという点は他のところと少し違う部分もありますが、結果的に出てきた課題は似たようなものでした。例えば病院ボランティアや高齢者福祉施設、障害者福

祉施設のボランティアも似たような課題が少しあるなーと感じましたし、生涯学習や社会教育、学校外教育でも、そういった活動における課題、今後自分達が学ぶだけではなく、それをいかに社会に、又まちづくり等に還元していくかということが生涯学習分野でも非常に課題になっています。そういう点に関して共通している印象を受けました。要するに活動の内容や文化は違うが共感し合うことができると思うし、そこにヒントがあるような気がします。

今泉：ありがとうございました。お互い自慢出来るところ、こちらは高齢化だけど、私のところは若者が多い、うちはお金をもっているがあそこはもっていない、そういうところを上手く出し合いお互いにくっつけ、そしてアドバイスできるような関係を作ることが重要だという素晴らしい意見でした。それでは木村さんどうぞ。

木村：若者の話ですが、まちづくりに携わってきた島根県隠岐の島に海士町というところがあります。まちづくりの業界ではかなり有名なところです。約５年間で人口２５００人の島に １ 割の２５０人がＵターンＩターンで町に来ました。一致団結すれば一人議員さんが送り込めるぐらいの人数です。初めに来た人たちは主に３０代～４０代でかなり高学歴の人たちが沢山います。僕が一度話した方は京大出でトヨタの高級車のラインを組み立てる仕事をしていた方でした。そのわけを聞くと、ここには希望がある、海士町はいろいろな問題も抱えているが、それは日本がこれから抱える問題を先取りしているだけです。ここは人口が少ないから私の活躍の場も広がるし、自分がここでなにか結果を示せれば、それは日本全体に対して何かを働きかけることが出来るのではないかという希望をもっているからです、と彼は言いました。

もう一つ、海士町では若い人がまちづくりを担うべきだということで内容はともかく積極的に雇用しています。商品開発研究生だったと思いますが、月に 15 万払い保険や年金も面倒をみるので、とにかく１年間海士町にきてください、１年間であなたがこの島で素敵なもの見つけ商品化してください、そういう制度なのです。

町の人曰く、成果はとにかくいいから、町に来てくれということです。お金は用意する、保障するからとりあえず来て自由にやってくれと、その中で貴方が見つけ出したものを形にして下さいということです。実際に成功した人もいれば途中で帰った人もいるそうですが、そのネットワークをつくり彼らが東京に帰った際に、「海士っていう町があってね・・」という話をします。それに触発された若者が今、海士町を訪れています。こういう連鎖が今も続いているそうです。何をいいたいかというと要は、お金を用意すればそこに若い人が集まるということですね。以上です。

今泉：それで木村さんもきたのでしょうか？
木村：本当に同じ構図だと思います。

今泉：木村さんを呼んだ仕掛けを後でお聞きしたいと思います。確か同じように対馬でも集落の活性化のためのアドバイザーを外から迎え入れています。やはりそこには何かひきつけるものがあるのですね。自分に役に立つ何かがそこにある、そして受け入れてくれる環境があるのです。そのような受け入れ環境が自分の組織にあるかどうかをちょっと問いかけてみてはという感じがします。ありがとうございました。

今泉：以上お聞きになり、田中さんいかがですか。

田中：この会の主催者の一人として非常にうれしく思います。といいますのは、午前中の会も非常に盛り上がったと評価していますが、先ほど終わった施設系のボランティアのみなさん日頃から今後どのように皆さんを引っ張っていけばいいのか大変苦労されているにも拘らずコーディネーターから、「担い手になりたい」「やってみたい」ですか、という質問が出たとき半数の方が賛同されました。このことに私は大変感激しました。私は２割から３割かなと思っていましたが半数の方がやってみたいと答えられたことが一番うれしく、まだ文化ボランティアも捨てたものではないと心強く思いました。

今泉：本当に前向きな方に今日は来ていただき、うれしい数字ですね。ただしそういう方が今後の展開について悩みを解決しノウハウを吸収する場所が今のところないので、そういう場所をこれから作っていくべきだと思います。

（パネルディスカッション） 討論会

コーディネーター	今泉　重敏氏
パネリスト	古賀　弥生氏
〃	今村　晃章氏
〃	木村　　航氏
〃	田中　正治氏

今泉：では只今より討論会に移りたいと思います。分科会それぞれに共通することがありましたね。高齢化の問題、どうしても若者がいない、このままいったら数年後どうなるかです。先日ある団体の方に、１０年後の歳を書いてもらうとみんなびっくりして、「もうこの世におらんぞ」という人までいて大変なことになりました。動きが受動的というか、自発的に動きにくく、施設系の方は行政の呼びかけで集まっているだけに動きが受動的というか、自発的に動きにくくなりがちです。活動を始めると中身がどうだったか、私達は本当に役に立ったのか、これでよかったのか、そういうことを考えるのです。行政はボランティアにたいして対応支援が少ないという意見もありましたが、行政（受け入れ側）は何人参加したとかそちらのほうに関心がいきます。なぜなれば受け入れ側は一人で多くの事

を担当するため、日々の業務に追われ一生懸命やっていることは分かりますが、どうしてもボランティアとの間に使う時間が短くなり、こまめな対応が出来ないのです。それにまちづくりへむけてのつなぎ役が現在あまりいないのが現状です。それでは共通部分も出てきますが二つに分けて解決していきましょうか。

まず活動の高齢化問題、施設系ボランティアは受動的になる、一方受け入れ側は日々の業務が多く対応が難しい、それに行政の対応・支援が少ない。日頃の活動のバックアップはなかなかして貰えない等です。それに現状つなぎ役がいない。それでは各内容についてパネリストの皆様の突っ込んだご意見をいただきたいと思います。

今村：高齢化の問題ですが、文化ボランティアだけではなくて日本中が高齢化の問題を抱えていますからどこのボランティアでも大変苦労している話を聞きます。実際に相談件数も多いのです。そこで受動的な施設系と自立的なまちづくり系とでは事情が少し違ってくるかもしれませんが、一つ申し上げたいことは「高齢化」が問題、という人が多いのですが、少し整理すると「高齢化」が問題であれば「おじいさんおばあさんが生きていること」が問題だ、と言う話しになってしまいます。だから高齢化が問題なのではありません。高齢化に伴って発生する問題が問題なのです、と私はいつも申し上げます。ではなにが一番問題かということです。事務を引継ぐ人がいない、代表になり手がない、世代交代が進まなくて会に活気が無い等いろいろなことが出てきます。私がいつも思うのは、究極二択が良いか分かりませんが、じゃあ若手を入れたいのか入れたくないのかというところなのです。本気で入れたいと思っているのか、まあくればいいやぐらいの思いなのか何れかだと思うのです。くればいいやという気持ちでくる時代ではないことはなんとなくわかると思います。先ほど木村さんの話にありましたとおり、若手はボランティアの世界では取り合いです。そこを認識すべきだと思います。若い人がボランティアをやりたい動機は、みんなのため社会のためというよりも、どちらかというと自分のプラスになるような社会を体験したい、人生経験をつみたいという動機がすごく大きいのです。そこを充足できる仕組みを団体としてきちんと提供できているかということと、是非担ってくれと本気で思っている方はそれなりの仕組みが必要です。ボランティアなのにそこまでしなければならないかと思う方も中にはいると思います。別に世代交代しなくても自分達で活動できるところまでやり、できなくなったら終わる。それでいいと思います。施設系はそういうわけにはいかないと思うかもしれませんが、施設側も別に世代交代して引き継ぐという形ではなく、若手だけの舞台など高齢の方と違う活動を展開する、そういった形で分けるといいかなと思います。いつも私が高齢化の話を相談にくる方に聞くことは、例えば６０代の方に、会員の平均年齢が８０歳の団体にあなたは積極的に入りたいか、と聞きます。答えはほとんどＮＯです。ですから同じ組織の中で世代間交流が云々という話をする必要はなくて、世代別に構成されてもいいと思います。その中で一緒にやれる部分はやっていくというような仕掛けがやはり必要ではないかと思うのです。

今泉：いくつか重要な視点が出てきましたが、本当に若者が欲しいのかということですね。８０歳の団体に入りたいかという話はわかりやすかったですね。

田中：「高齢化はボランティアの共通の悩みである、これはよくわかります。昨年のフォーラムで、ある読み聞かせの団体から出た言葉があります。世代交代が難しいというなか、限られた人材で、できる人が、できるところで、できることを楽しくやりたい、これに徹するという発言がありました。まさにこれだと思います。今、今村さんがおっしゃった、次のステップの話になりますが、やはり現在抱えているメンバーで如何に上手く転がしていくかということが我々の立場であり大事だと思います。しかも楽しんでやるということが一番、そういう意味でそれぞれの団体が抱えている高齢化の問題解決にはもう少しみなさんの意見をお聞きしなければならないと思います。

今泉：高齢化自体が問題ではないと今村さんは言いました。高齢化によって病気になり外に出られなくなる、その結果活動ができなくなる、それが問題だと。高齢化自体を否定するわけじゃないということは非常に重要なことです。

木村：高齢化のことは問題ではないということに頷きましたが、異なる年齢の人がいることはやはり強みですということを、フォローの意味で言います。役割が違うと思います。
　津屋崎での活動は意識的に異なる年齢の人を一緒にしています。まず上の人は地元の人で地域の中に人脈を持っています。人を集める時に号令をかけてもらう、挨拶などは彼らが一番いいですね。若い人だと、「何だお前は」という雰囲気になりがちで通るものも通らないことがあります。風通しをよくしてくれるのは、やはり上の人だなぁと思っています。中間層の人はやはりお金を回していく役であり、上の人を立て下を厳しく育てることです。一番下は高校生や中学生ですが、彼らは大人達の振る舞いを見て学びます。出て行った彼らが戻ってくる動機となる為にも、彼らがその場にいるということは重要だと思います。楽しかったから大きくなったらそれを引き継ぐという流れができたらいいですね。地元の人と外の人が一緒にやっている博多祇園山笠がまさにそれだと思っています。結構外の人が増えているようです。上の人は上の人で風通しをよくし、何かあったら責任をとります。中の人は上手くまわす、下の人は上の人を立てながら仕組みを自分の中に取り入れて新しく作ります。

今泉：すばらしい事ですね、役割分担がここにもできています。上は責任をとるから頑張れ、と一言いってくれる、と「わーっ」と進むそういう感じがします。古賀さん如何がでしょうか。

古賀：結局その団体が何をしようとしているのかというところに結びついてくるのだと思います。今話にあったように山笠のような地域の祭りを伝承していく、新しい世代にも伝えていかねばならない使命をもった活動であれば、やはりそうして上の層、中間層、若い層があり、さらに子供達も巻き込んだ活動をし、それが永続していく仕組みを作ることが必須だと思います。ご自信の活動がそこに集まった人材を上手く活用し、楽しくやっていくことが結果的に地域に貢献しているものと思えるのであれば、若い人が入るということが本当にいいことなのか一度考えてみたほうがいいかもしれません。単に高齢の方が多いからということや活動が長くなったからふと気づいたら高齢になっていた、ということが決して悪いわけではないのです。それぞれの団体の活動趣旨によると思うので一度活動内容を振り返ってみたら課題か否か自ずから見えてくると思います。

今泉：いいですね。みなさん自分の団体のカルテを作りましょうか。自分達の活動がどういう状況なのか、こういう課題がある、何をしたいのかと。そういうものを持ち寄れば処方箋をもった団体がいるかもしれませんし、アドバイザーもいることと思います。

今村：私の言葉足らずのところをフォローしていただきありがとうございます
木村：いえいえ、とんでもありません。発言していただいたからここまで議論ができるのです

今村：やはり世代間交流が上手くいっている団体も世の中にはたくさんあり、そういうところの代表者やご年配の方がいるところに多分世代間交流を上手くやっていくヒントがあると思います。この話はどの分野でも共通する話ですから、そのような方にコツを聞くとか事例発表をしていただくと大変参考になると思います。

今泉：是非フォーラムでも上手くいっているところの事例を聞きたいですね。会場のみなさん如何ですか。私のところも高齢化で悩んでいるとか、このように上手くいっている、またそういうところを知っているという方がいらっしゃったらどうぞ。

志賀：地元古賀市文化協会の志賀と申します。私どもは年間 5 事業やっていて会員も 900 名ほどいます。一部若い方もいますがほとんど高齢化しております。理事も同じく高齢化しています。しかし力仕事が必要な時、例えば舞台一杯に背景画を描く時やもっと手が欲しい時、助けてくれるのは隣の高校の美術部の学生さんでもう何年も続けております。今度 30 周年の記念誌を作るのにパソコンで入力したい、こういう時はパソコン部にお願いして作ってもらい少しですが図書券など差し上げます。そのようにピンポイントで若い人をその都度お願いするという方法をとっております。

今泉：素晴らしいですね。地元、目の前に高校や大学がある場合はそれを活用する、いいですね。ありがとうございました。他になにかございませんか。

船村：「宗像歴史観光協会の船村といいます。壇上の皆様若いので高齢ということに対して実感がないかと思いますが、大変さを一つ申し上げますと、私どもはボランティアガイドですから外に出て人様に喋ることが活動の大部分ですが、喋れなくなるのです。体力知力健康面で辞めるかたが続々と出てきます。これが高齢化の一番の悩みです。ではどう対応するか、私どもは辞める人数以上に入ってもらう。結果同じような年代のかたが入ってきます。こういうことで繋いでおりますが私の本音は若い女性をいれたい。会のおばさんたちは若い男性をいれたい。でも曜日に関係なくでられる若い人はきわめて限定的です。
やはりある一定の年齢層の人しか活動できない。それは織り込み済みで辞める人以上に入って貰うということです。

今泉：ありがとうございます。わかりやすいですね、辞める人以上に人を増やす、ただ平日に働いている人に来てくれといってもそれは無理ですから先程のように、こなくてもできる事と上手く組み合わせていくといいのかなと思います。

福山：九州歴史資料館の福山と申します。私のところは高齢化ですが全然困っていません。もともと高齢の方しか入っておりません。それに先程の方とは別で室内で活動しています。そして相手は小中学生、それに高齢の方がお客さんです。そういう方の体験学習の支援ですから逆に、孫相手ぐらいでやっているほうが子供達も言うことを聞きます。そういうことで全然困っていません。私がちょうど平均年齢 70 歳です。

今泉：「いやお若いですねー、文化ボランティアをしている方はみな若いです。孫の相手ということですね。できないことを無理にするのでなく、できることを優先的に上手く使ってやるというプラス思考ですね。すばらしい。他にありませんか？無ければ高齢化の問題はこれぐらいにして、少し視点を変えて高齢者だからできることを上手くやっていこうではないか、そして出来ないことは若手に頼むこと。若手が本当に欲しいのか否かを外に向かってきちんと訴えることが必要だということですね。そのためにそれぞれの団体でカルテを作りきちんと整理して、それを見せ合うことでお互いに補充保管補強の関係をつくっていくふれあい交流の場も必要だし、それを総括する意味でフォーラムも必要になってくるのかなと思います。